

# 環境倫理——タイ仏教の視点から

ドナルド・スウエアラー  
大西克明 訳

仏教者の環境倫理について述べるに当たり、私は三人の仏教者に焦点を合わせたい。

彼らは、タイ国の仏法 (Buddha-dhamma) の現代におけるスポークスマン・解釈者として最も著名な人々である。

その三者とは、プッタタート比丘 (Buddhadasa Bhikkhu: 1906-1993)<sup>①</sup>、P・A・パユットー (P.A. Payutto: 1938)、スラック・シワラック (Sulak Sivaraksa: 1933) である。

## ① プッタタート比丘：「ダンマとは自然なり」

ニュースメディアやテレビ報道は、日々、環境破壊の広がりや複合性を、私たちに突きつけている。例えば、地球温暖化、アフリカの干ばつ、極地の氷床の溶解、海水面の上昇、異常な気温変動、暴風雨の増加、海洋汚染や水質汚染などである。環境問題の多くの側面を理解するために、科学は、この半世紀あまり、多大な貢献をしてきた。科学の共同研究がなければ、私たち

は地球温暖化や、種の絶滅、あるいは汚染の健康への影響などの実態に気づかなかったであろう。しかしながら、環境問題の「事実」に関する知識が増大しているにもかかわらず、それらが、人間に自然搾取のたぐいの行動を改めさせたことはないし、消費をやめられない生活習慣に影響を与えたこともない。環境保護論者は「持続可能な未来のために人間の意識や行動を变容させるには、科学や公共政策だけでは十分でない」ことを次第に実感してきている。「消費行動パターン」や「地球への配慮」に対する私たちの認識や態度そして行動を転換させるためには、倫理や宗教、精神性が関与していかねばならないのである。

地球への配慮に関する我々の認識や態度そして行動を変容させるために、ブッタタートにおける「自然 (thammachat) とダンマとの一体視」は有益であろう。<sup>(2)</sup> 「ダンマとしての自然」がもつ解放(解脱)させる力を<sup>(3)</sup> 知っていたゆえに、彼はスワンモーク僧院 (Wat Suam Mook) の創設を思いついたのである。教育と実践の拠点であるこの僧院は、タイ南部のチャイヤヤー郡にある。

この「森の僧院」を取り巻く自然環境は、ブッタタートにとって、自己変革のための媒体以外のなにもでもなかった。

「木々も、そして岩や砂も、泥や昆虫さえも話すことができるのだ。私は、一部の人々がピー (phi / 精霊) とカテーワダー (khwada / 神々) のわざと信じているようなことを言っているのではない。そうではなく、我々が木や岩の近くの自然のただ中に住むことによって、真の意味で日常を超えた感情や思念がわき起こってくるのだ。最初は、安らぎと静穏 (sangopyen) の感覚を実感し、やがてそれは自己超越の感情へと高まっていく。自然は、日常の世界で我々を苦しめる厄介ごとや心配ごとから解放 (wink) してくれるのだ。その結果もたらされる深い静穏の感覚は、心と知性を守る助けとなる。つまり、自然が語る教訓に耳を傾ければ、我々は自己への執着がもたらす苦しみ (pam think) を超えて、新たな生へと導かれるのである。これが、木々や岩たちが我々に語りかけることができるという意味である。彼らは我々に教えてくれるのである。心の混乱や

落ち込み、不安や苦しみの熱を鎮めるとは、どういふことなのかを」(Siang Takong Jak Thammachai)

### 自然破壊はダンマと人間性の破壊

プッタタートにとって、木、岩、大地、砂、動物、鳥、昆虫たちが人間に無私無欲の教訓を教えることができるのは、それらが自然の中に存在しているからこそである。プッタタートの「精神的な生命中心主義」(spiritual biocentrism)と私が呼んでいる哲学において、自然が与えるこの教訓に従って生きるとは、ダンマと一体になることにほかならない。ゆえに、自然破壊はダンマの破壊を意味するし、ダンマの破壊は私たちの人間性の破壊なのである。

晩年のプッタタートにとって、自然環境の劣化が大きな心配の種となっていた。死の三年前、一九九〇年に行われたスワンモーク僧院での講話のひとつは「仏教者と自然のケア」(Buddhasasnik Kap Kan Anurak Thamma-chai)であった。この講話は、彼の環境問題への関心の「生命中心性」と「倫理性」を理解する手がかりと

なる。それは、環境の保全と持続可能性を求めての彼の祈願として読むことができるかもしれない。

タイの言葉に「アヌラック」(anurak)がある。私はこれを環境的な「保全」の意味で使いたい。多くのタイの僧侶が、自らの県や郡において、森林開発をやめさせる取り組みに参加している。彼らは、「森林保護僧」(pha anurak pa)と呼ばれている。スワンモーク僧院は、自然環境保護に対するプッタタートの献身を体現している。また、彼の生涯と業績に具現されている「アヌラック」の精神は、より豊かで繊細な内容をもっている。すなわち、「保護し、安全に防護し、世話をする徳を身につけている」というニュアンスをもつパーリ語のルーツに近いのである。「アヌラック」という語を使うことによって、プッタタートは(パーリ語の)「アヌラッカ」(anu-rakkha)の語のより深く仏法的な意味を伝えようとしている。すなわち、人間の本来から流れ出るところの内在的で能動的な「世話をする(ケアする)」精神である。言うなれば、「ケア」とは、地球ならびに生きとし生けるものへの我々の基本的な共感を能動的に表

現したものであり、その共感は「自然の声」の中にドラマを聴きとることによって見出されるのである。ある人が森をケアするのは森に共感するからであり、それは自分を含む人間をケアする理由が、その人間に共感しているからであるのと同じである。

「アヌラック」、つまり共感し続ける能力は、プッタタートの思惟の根幹である「執着しないこと」「自己へのとらわれからの解放」とつながっている。したがって、仏法的な意味での「ケア（アヌラック）」とは、あらゆる生命すなわち有情無情、人間、自然との共感的一体感を積極的に表現したものである。

## ② P・A・パユットー…仏教と森林

現代のタイで、指導的学僧の一人として広く認められたパユットー（僧名：Phra Brahamagnabhorn）は、一九五〇年に出家し沙弥となった。パーリ語教程（パリエン試験）の設立以来、最も高い九段に合格した沙弥は四人しかないが、その一人であり、一九六一年に得度。高位の僧階と欽賜名（Phra Maha Prayudh Payutto）を授与さ

れた。彼は、マハー・チュラロンコン仏教大学において最優等で学位を取り、その後、同大学の事務総長補佐、さらにバンコクのプラピレイン僧院（Wat Phra Pien）の僧院長（住職）となった。仏教の学術的研究への彼の主な貢献の中には、二冊のパーリ語辞典がある。『タイ・パーリ語聖典』最新版、ならびにマヒドン大学刊行の『CD・ROM版 パーリ語聖典』の編集の中心者だったのである。また、彼の代表作は『プツダの法——自然の理法と生きることの価値』（*Buddhahumma: Natural Laws and Values for Life*）である<sup>(4)</sup>。加えて、仏教教理に関する著述のみならず、「仏教教育」「仏教と科学」「仏教経済学」「仏教と環境」など様々なテーマについて、彼は幅広い執筆を行ってきた。仏教学と教育への傑出した貢献により、彼は、幾多の名誉博士号を授与され、一九九四年にはユネスコ平和教育賞を受賞した。

一九九〇年代前半、パユットーは、仏僧共同体（サンガ）と森林の関わり合いの問題に取り組んだ。これは、タイ北部の大規模な森林破壊や、北東部の村々の伝統的な森林経営が政府や民間企業によって侵害されてい

ることに対して、一部の僧が反発したわけだが、パユットーによれば、彼らの対応はあまりにも政治的すぎた。彼らとの対話については、後にパユットー自身も書いて出版されたが、この対話において彼が主張したのは「森林保護は、ブツダの人生とその教えという規範に基づいてなされるべきであり、初期仏教徒の少欲知足の行動の伝統や、タイの歴史における仏教の発展などを踏まえてなされねばならない」ということであった。彼は自らの立場を、次に示す教義の観点に置いた。すなわち、テーラヴァーダ仏教（上座部仏教）の中

核的な教えの一つである「煩惱 (Kilesa) の克服」は、混乱や不安、ストレスからの離脱 (viveka) を要求しているが、これらは私たちの大多数の生活の特徴づけている「獲得しては浪費する世界」から生まれるものである。ブツダの時代において、森林は、こうした精神段階に達するのに必要な「独居」にとってふさわしい環境であった。彼はまた歴史的な視点から、十三世紀にタイ王国で始まった「森の僧院」が、タイ仏教の組織と実践にとって不可欠であり続けてきたと主張する。

したがって、政府が森の僧院を支援しないとすれば、それはタイ仏教を初めから特徴づけてきた修行を否認することになるのだと。

いわゆる「緑の仏教者」は、「縁起」とか「悉有仏性」といった哲学的概念を考察しつつ、自然の保存・保全を目指して生命中心主義的な環境論を展開する。彼らとちがって、パユットーは、より人間中心の立場を崩さない。すなわち、森林を——より広く言えば自然を大切にするのは、そこが仏教徒にとって精神的目標や道徳的価値を追求するのに理想的な場所だからなのである。この立場を、彼は教義的かつ歴史的に裏づける。すなわち、仏教徒にとって森林保護はエコロジー的というよりも宗教的に基礎づけられていると主張し、「手つかずの自然環境こそが仏教の精神性を最も発達させたものであり、僧院の禁欲的伝統において、かけがえのない場所であり続けてきた」という理由で、自然の保全を支援するのである。

その一方で彼は、タイの仏僧共同体 (サンガ) の役割を政治化してしまった自然保護僧の活動を問題視する。

彼の立場は、森林などの自然環境保護を宗教的かつ歴史的理路から支持するものであり、そこには政治的に活動する僧侶への批判が暗黙裡に含まれている。彼らは仏道修行の精神的目標を危険にさらすものだと、パユットーは見ているのである。

自然と人間への「正見」を広めよ

仏教の伝統では、人間の共同体と自然とは近い関係にある。これとは対照的に、近代のグローバルな環境破壊は、世界に広がった西洋的世界観から生じたと、パユットーは見なしている。彼の見解によれば、西洋的世界観は、次の誤った三つの信念によって損なわれている。「人類は自然から切り離されている」「人間は自然の主人である」「幸福は、目に見えるモノを所有することによってもたらされる」という信念である。パユットーから見れば、自然環境の保全と保存は、公共政策の改善や環境保全法の強化だけによって達成されるのではない。そうではなく、必要なのはパラダイムの転換である。自然への向き合い方のみならず、人間

に対する態度、そして個人の人生の目標に対する態度について、現在の風潮に倫理的な転換をもたらさなければならぬのである。仏教では「正しい見方が、正しい行動を導く」とする。この立場を踏まえて、パユットーは「正しい見方が広がり、人類は自然の一部なのだと自覚されないかぎり、自然環境の劣化という世界的傾向は進行し続けるだろう」と強調している。

### ③ スラック・シワラック ..

#### 社会参加仏教の運動家・環境保護主義者

スラック・シワラックは、タイの著名な在家仏教徒で社会活動家、著述家であり、エンゲージド・ブディズム(社会参加仏教)の国際的運動における重要人物として広く知られている。イギリスの大学で法学を修め、一九六一年にタイに帰国するや、出版ならびに大学での講義に携わり、(六三年には)『社会科学評論』(Social Science Review)誌を創刊、自ら編集長となった。『社会科学評論』誌は、一九七六年に政府によって発禁となるまで、<sup>5)</sup>タイの知識層が読む刊行物として指導的位置

にあった。一九七一年、彼は、コーモン・キームトーン財団 (Konol Keenthong Foundation / KKF) を設立した。<sup>(6)</sup> その目的は、タイの若者に対して、個人的利益だけを追求するのではなく社会正義と公益のために人生を捧げるよう啓発することにあった。同財団を最初のものとして、彼は多くのNGOを発足させた。

よく知られているものには、TICD (Thai Inter-religious Commission for Development : 開発のための宗教委員会) や、INEB (International Network of Engaged Buddhists : 仏教者国際連帯会議 / 社会参加仏教国際ネットワーク)、SEM (Spirit in Education Movement : 魂の教育運動) などがある。これらの、また他の組織やネットワークを通して、スラック・シワラックは、経済改革と教育の改良、社会正義と環境正義 (environmental justice)、そして人権と民衆の権利の実現のために生涯を捧げてきた。

彼はタイ語で何百もの評論や論文を執筆してきた。また英語で数点の評論集を出しており、とくに必要な著作には『平和の種子——新しき社会を目指す仏教者の視点 (Seeds of Peace: A Buddhist Vision for Renewing Society)』

『社会参加仏教——宗教・開発・タイの再生 (A Socially Engaged Buddhism, Religion and Development, and Siamese Resurgence)』『アジアと変化する世界について——ひとりのタイ仏教者は語る (A Thai Buddhist Voice on Asia and a World of Change)』がある。タイ語での自叙伝を要約した英語版は『国を愛するからこそ異議申し立てをする——エンゲージド・ブディストの自伝 (Loyalty Demands Dissent: Autobiography of an Engaged Buddhist)』とのタイトルで出版された。

おびただしい数の著作において、彼は環境破壊の問題、特に自国のそれについて、力をこめて語ってきた。著作と同様に重要なのは、環境の保存や環境正義のために彼がつくってきた数々の組織と運動である。彼が創設したNGOのひとつが——ただひとつの組織以外はすべて——取り組むべき課題として環境問題を挙げている。なかんずく、自然のままの環境を保存することを最優先課題としている。

「セキヤダンマ (Sekkhiyadhamma)」（タンマの学生）は、地方の自然環境を保存するために現地で活動する仏教

僧のネットワークであり、とくに力を入れているのは村落の経済活動に不可欠の森林を保存することである。彼らの取り組みには、教育面と政治面の両面がある。つまり、天然資源を保全するより良い方法について村人に教育するとともに、商業化、工業化、都市開発の波から地方の社会と文化と自然環境を守る努力をしているのである。彼は、バンコクの郊外に、ワンサニット・アシラム (Wongsanit Ashram) という拠点をつくった。それは、彼が好んで引用したガンジーの言葉「シンプルに生きよ。他の人もシンプルに生きられるように」の通りに、自然のそばで簡素な生活を送るという思想を実行する場所である。そのアシラムは、<sup>1</sup>「思慮深く、他者を気づかないながら、非消費的に暮らす」というライフスタイルを実践するセンターになっている。

### 資本の暴力<sup>2</sup>と第一線で戦う

スラック・シワラックの環境倫理の基盤は、彼の精神的指導者であるプッタタート比丘と同様、仏教の縁起の理法をホリステイック（全体論的）に理解するところ

にある。その結果、縁起の思想は、自然への深い敬意をもたらしものとなる。「すべては相互に影響し合っ

て成り立っている (inter-becoming)」——これはティク・ナット・ハン<sup>3</sup>の表現である——という認識に到達するには、注意深く目覚め続けている精神集中 (mindful awareness) <sup>4</sup>が必要であるが、この認識はおのずから、生きとし生けるものへの共感的一体感と、慈愛の行動へと人を導いていく。

こうした考えを前提として、スラック・シワラックは、慈愛の行動のための具体的指針を、伝統的な仏教教理を用いて示す。それは「四無量心（慈無量心、悲無量心、喜無量心、捨無量心）」すなわち他者に幸福を与え、ともに苦しみ、ともに喜び、しかも平静に接していく心であり、「四摂法（布施、愛語、利行、同事）」すなわち人々に与え、優しく話し、奉仕し、公平に接する生き方であり、そして「五戒」であった。

例えば、彼は、五戒の第一の「不殺生戒」を、グローバル企業の力による貧困層や自然環境への構造的暴力に対して適用する。彼は、自身の環境保全計画の中に、

国内外の「行政と企業による自然からの搾取」への鋭い批判を盛り込んだ。「権力は腐敗する。絶対的権力は絶対的に（とことんまで）腐敗する」との原則に当てはめて、彼は「自由市場資本主義のグローバルな経済構造は、貧困層と環境の犠牲の上に、必ず富と権力の集中をもたらす」と信じている。これこそ、彼が「構造的暴力」と見なすシナリオである。それだけでなく、自由市場資本主義は、貪欲と利己主義と所有衝動が動かす「消費文化」をつくりあげる一方で、自然の保存・保全に欠かせない人間としての素朴さ、責任感、配慮といった資質をないがしろにしてしまう。彼は、消費文化のなかには「自立した個々ばらばらの人間」という幻想があることを知っている。その幻想が、「人間の共同体」を蝕み、「人間と自然との相互依存性に気づく」ことを妨げているのである。

スラック・シワラックが理想とするのは、タイの農村の環境である。そこは比較的小さな自給自足的共同体であり、自然環境と調和して暮らしている。彼がそういう村を理想とするのは、甘い回顧趣味的な意味で

はなく、より人間味があり、面倒見のよい調和的社会的ための実例をそこに見ているからである。今より単純であった前近代まで回帰しようという非現実的な提唱ではなく、彼は「より民主的で平等であり、排他的でなく、思いやりのある社会」の建設に献身する多くの職業の人々（学者、労働者、農民、環境運動家、公務員、そして経済界の人々さえも）による同盟とネットワークを築こうとしているのである。

近年、彼は、政府や民間による多くのプロジェクトに対し異議申し立てをしてきた。それらは、村を移転させたり、伝統的な生活様式やその基盤である共同体を弱体化させるプロジェクトであった。その中には多くのダム建設計画も含まれていたが、これは地元住民との事前の相談もなく進められたもので、小規模農業の犠牲の上に、産業界が使用する莫大な水を確保することを主な目的としていた。また、プロジェクトには、営利事業の推進のため、特に木材バルブ用のユーカリ植林のために行われたタイ北部・東北部の森林破壊も含まれている。さらに、タイ内陸で最大の水がめであ

るソクラー湖の周辺の土地の流失や、それによる湖の汚染をもたらしたプロジェクトもある。

彼の仏教環境哲学は、ブッタタート比丘とティク・ナット・ハンの思想から大きな影響を受けている。だが、より思索的・瞑想的な彼らのスタイルとは対照的に、スラック・シワラックは、人間的正義と環境正義のために、第一線の現場で積極的に戦う。一九九八年三月六日、彼は逮捕された。タイ南部・カーンチャナブリー県での「タイ・ミャンマー間の（天然ガスの）ヤダナ・パイプライン建設」に抗議しての座り込みの最中であった。人権侵害と、パイプライン建設によってもたらされる環境被害に抗議するため、彼は我が身を危険にさらし続けたのである。これこそが、エンゲージド・ブディストとしてのスラック・シワラックならぬのは流儀なのである。

#### 訳注

(1) 「ブッタタート」とは「ブツダのしもべ」の意味。スワシモーク僧院（訳注3）を開設した後、自らこう名乗

った。

#### (2)

ブッタタートの「ダンマ」のとらえ方について、次のような解説がある。「彼は、ダンマという語の意味をパリー語のオリジナルな意味の中に求める。彼によれば、その語の根本的な意味においてダンマは、自然(nature)・ダンマの生成」を意味するという。彼の解釈するダンマは次の四つの側面を含んでいる。「1」自然それ自体「2」自然の法 (law of nature) 「3」自然の法にしたがって適切になされる行動「4」自然の法にしたがってなされた適切な行為がもたらす結果。ダンマ(自然)のこうした四つの側面は、本質的に相互に関連づけられている。それらは、ブッタタートの教えの中核を形成しており、彼は、仏陀の教えの要点としてそれらを考えている (Sirkanehana 1985: 241)」（森部一著『タイの上座仏教と社会——文化人類学的考察』山喜房佛書林、一九九八、三五—頁）。

また、タイの僧侶の森林保護活動について、次のような解説がある。「僧侶が積極的に森林保護に関わるようになったのは、ダンマ(仏法)と自然というものが密接に関わっていることによる。ダンマとは、しばしば「仏教における真理」と訳されるが、仏教の真理とは、タイ語で自然のことをタンマチャート(法然)と呼ぶように、私たち人間が生かされている自然の秩序を指す。ブツダが悟りを開いたのも菩提樹の下という自然の下であった。(中略) 森や自然というものは

自分自身の修行の場であると同時にダンマそのものなのである。そして、森林を伐採し、自然を破壊することとは、とりわけ資本主義的な利益のために森林を伐採することは、物欲という煩惱（タイ語でキレース、サンスクリット語でदुःख）にとらわれた所業であり、ダンマを傷つけることにほかならないのである」（鈴木規之「農村社会の変容と仏教寺院——東北タイ・チャイヤブーム県ターマファイウィーン村を事例として」、西川潤・野田真里編『仏教・開発・NGO——タイ開発僧に学ぶ共生の智慧』新評論、二〇〇一、一五三―四頁）

(3) 「スワンモーク」とは「解放（解脱）のための園」「解放への力をくれる園」の意味。一九三二年五月、プッタタートが二六歳になる直前に開設した。

(4) 邦訳は『仏法 自然の法則と生きることの価値』、改訂版は『仏法 テーラワータ仏教の叡智』サンガ刊。ともに野中耕一訳。

(5) 一九七六年、クーデターにより、タイは軍事政権に戻った。スラック・シワラックも二年間の国外生活を余儀なくされた。

(6) 一九六〇年代後半から、学生が農村に入り、農民とともに農村の開発に取り組み運動が活発になったが、政府と軍による弾圧が強化され、活動家が射殺される事件が頻発した。犠牲者の一人であるコーモン・キームトーンという青年を悼み、スラック・シワラックはこ

の財団を設立した。

(7) Thich Nat Hanh（釈一行／1926年）は、ベトナム出身の禅僧で、詩人。ベトナム戦争の苦悩の中で、非暴力の反戦運動を展開。エンゲージド・ブディズムを提唱した。現在はフランスを拠点に活動。

※本文中にも適宜、補った部分がある。また小見出しは訳者による。

(Donald Swearer / ハーバード大学  
世界宗教研究センター名誉所長)

(訳・おおにし かつあき／東洋哲学研究所研究員)